法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-23

社会的養護における「家庭的」支援の検討 ：児童自立支援施設からの考察

IWATA, Mika / 岩田, 美香

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
6
(発行年 / Year)
2017-06-09

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６２８５１３４

研究課題名（和文）社会的養護における「家庭的」支援の検討－児童自立支援施設からの考察－

研究課題名（英文）A study of "Homelike"support for children in need of social care

研究代表者
岩田　美香（IWATA, Mika）

法政大学・現代福祉学部・教授

研究者番号：３０３０５９２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は社会的養護の支援について児童自立支援施設を通して検討することにある。「家庭的」支援は「個別性の重視」「非日常性」「児童と一緒」といった要因を含み、児童からの評価も高い。寮舎形態は、児童だけでなく職員においても「夫婦制」の方が評価は高く、「家庭的」支援の実施率も高かった。児童にとって日々の生活の困難は、他の児童との関係や、交代職員の対応に一貫性がないことである。また支援での「女性」の存在は大きく、それは児童に「女性」や「自分」を大切にする価値を授ける。これらの検討に加えて「いかにも施設」といった支援を減らしていく事も必要であり、そのためには職員へのサポート拡充も求められる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the social care support through facilities for juvenile delinquents. "Homelike" support includes characteristics such as " individual-attention," "non-routine," and "time with the children." This is highly valued by the children. In these facilities, the "Dyad system (a married couple is in charge of a dormitory)" is highly evaluated. In this style dormitory, the implementation rate of "Homelike" support is high. This style is also highly rated in staff evaluations.
The difficulties for children arise from their relationships with other children in their dormitories, and inconsistent communication among shift workers.
The presence of "women staff" in support roles is important, and encourages children to value " women" and "self." It is necessary not only to increase "Homelike" support but also to reduce the support for "institutional" characteristics. At the same time, it is also important to provide support for staff members.

研究分野：社会福祉

キーワード：社会的養護　家庭的支援　児童自立支援施設　小舎夫婦制

１．研究開始当初の背景

（１）児童自立支援施設（旧称：教護院）は、1997 年の児童福祉法の改正により施設名称が変更されると同時に、対象児童の規定も従来の「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童」だけではなく「家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童」も加えられた。また支援内容も「児童の状況に応じた支援」に「自立支援」や「退所後のアフターケア」も盛り込まれている。さらに他の児童福祉施設とは異なり、地域の小・中学校へ通うのではなく、分校・分教室という形で教育委員会派遣の教員による正規の公教育が敷地内で展開されている。その点では、地域に開かれることが制限的で自己完結的な施設であり、それゆえ、施設内での支援者と児童との人間関係が大きな意味をもつ。全国に 58 施設存在し、約 2,000 人の児童が入所している（2010 年３月現在）。そこでの支援は、寮長・寮母夫婦と入所児童数名で構成される「寮舎」による日常生活支援と、施設内に設けられている学校での教育で成り立っている。しかし、この伝統的な「夫婦制」、すなわち一組の夫婦が自分の家族とともに施設に措置された児童と一緒に寮舎に住み込み支援を行うという形態は、夫婦で担い手となる人材確保の難しさや労働環境などの理由で減少しており、児童自立支援施設に期待される「家族的機能」も大きく変化している。それ以外の職員が交代で寮舎を運営していく「交代制」の施設に、夫婦制の良さをどのように伝えるかが大きな課題とされている。

（２）入所児童の特性としては複雑な生育環境を背負っている児童が多く、さらに近年では被虐待児や障害を抱えた児童の入所も増加している。彼らを取り巻く人間関係に注目して行った調査（岩田、2011）においても、実父と生活している者は３割程度に留まっている。家族関係でも、家族との会話や食事、旅行などの経験が乏しく、反対に家族内での暴力を経験している。保護者が十分に機能しないためか、児童にとって施設の寮長・寮母の存在は大きく、家族以上に相談し頼りになる人としても認識されていた。そのような中で、入所児童が思春期に重なるため、性や性役割をどのように扱っていくのかと言うことは支援上重要な意味をもち、長年の夫婦制から何を学び、何を捨てるのかの検討も必要である。

〈引用文献〉

岩田美香（2011）「児童自立支援施設入所児童の社会的ネットワーク－少年院生との比較分析」『現代福祉研究』第 11 号、Pp.223-240。

２．研究の目的

（１）児童自立支援施設の寮舎について「家庭的」支援の検討を中心に実態を把握する。これまでも施設調査は成されているが、「機能」や「勤務体制」といった運営に注目した研究が中心であり、その回答も寮長や男性職員が回答する場合が多かった。「寮長寮母（夫婦）としての生活」とのやりくり、「職員間の連携」そして「入所児童支援」とのやりくりをいかに行っているのか、そこでの思いや困難や工夫はいかなるものであるのか等も含め、生活実態と意識について、女性（寮母）の視点も含め明らかにしていく。また交代制の施設においても、「夫婦制の代わりとして」あるいは「新たな支援の形態として」の現行の支援について、同様の検討を行う。

（２）児童自立支援施設の子どもたちが十分な家庭的養育を受けていないという生育歴と、彼らが思春期・青年期という発達段階にあることを考慮して支援を検討する。児童たちの自立支援については、社会的趨勢となっているジェンダフリーを目指していくだけの支援でもなく、また家父長制的な性別役割分業でもない支援が求められる。特にそれは、将来、彼らがパートナーとの関係において、固定的な性別役割に縛られるものではない柔軟な関係を築くことができるような育ちを支援するものでなければならない。施設退所後のアフターケアも含めた、今後の児童自立支援施設での支援のあり方について考察する。

３．研究の方法

以下の調査を実施し検討を行った。

（１）もと寮長・寮母として寮舎を担当していた方へのヒアリング調査

全国児童自立支援施設協議会退職者交流会の協力を得て、スノーボール・サンプリングによる、もと寮舎担当者 14 名（男性寮長８名・女性寮母６名）に対して、2015 年１～５月に実施。

（２）現職の職員へのアンケート調査

全国児童自立支援施設協議会の承認を得て、全国 58 施設に 1,457 票（個別封筒による調査票）を配布し、56 施設から 1,218 票を回収した（回収率 83.6%）。2015 年６月実施。

（３）現職の職員へのヒアリング調査

４施設（夫婦制２施設、交代制２施設）の協力を得て、施設職員 19 名に対して実施。職員の内訳は、職員経験５年未満（男女各４名）、職員経験 10 年以上（男女各４名）、課長職３名であり、2016 年７～12 月に実施。

（４）入所児童へのアンケート調査

全国児童自立支援施設協議会の承認を得て、全国 58 施設に 1,359 票（個別封筒による調査票）を配布し、50 施設から 1,055 票を回収した（回収率 77.6%）。2016 年 11 月実施。

４．研究成果

（１）「家庭的」支援について

・職員からみた「家庭的」支援とは、一人ひとりのお誕生会の実施や、一緒の買い物、病気時の看病など、「個別性の重視」や「非日常性」「子どもと一緒」といった要因を含んでいる支援であった。子どもにとっても、自分のために何かをしてくれていると実感できる支援であり、子どもたちにとっても「うれしい」支援であると評価されていた。

・一方、「家庭的」とは思われない施設内における「日課表」などの使用については、交代制の施設の方が多く利用しているが、子どもたちは、こうした「枠」について、必ずしも否定的に捉えているわけではなく、過半数の子どもは「生活しやすい」と回答している。児童自立支援施設の支援が「枠のある生活」と言われ、一定の枠組みと集団の力を用いて支援を展開している事は、子どもたちにも一定程度評価されている。

（２）支援の検討

・寮舎の形態に関する子どもたちの評価は、夫婦制の方が満足度は高く、「家庭的」支援の実施率も高かった。その背景には、施設における各寮や各職員の裁量も関連している。

・反対に、子どもたちにとって「生活しづらい」要因は、集団として一緒に生活する他の

子どもとの関係性や、職員の対応の一貫性の欠如についてであった。
・支援における「女性（寮母）」の存在は大きいと評価されていた。女性の支援は、「指導」ではないアプローチで支援がなされており、それらは、子どもたちに「女性」を、入所女子児童にとっては「自分自身」を大切にすることの価値を共有することにもなる。
・子どもたちの回答からは、「家庭的」か否かの検討以前に、職員による対応の差への不満や現行の支援の「質」を問う内容も散見された。また職員自身の評価も「家庭的」で重要な支援であると思いながらも、実施率が低い支援もあり、こうした施設間、職員間における支援の質の底上げを行っていくことは急務である。
・支援の質については、「家庭的」支援を増やすだけではなく、「いかにも施設である」という支援をいかに減らしていくか、施設としてコントロールしている個々の規律について、何の誰のためのルールであるのかといった再検討が必要であることが、職員からも回答さていた。そのためには寮長・寮母や職員に対するサポートの拡充も求められる。

（３）新たな課題
・回答者自身が交代制で勤務していても「夫婦制」への評価は高く、人手不足についての危機感を抱いていた。閉鎖的あることやプライバシーの確保の難しさなど「夫婦制」の短所を改善しつつ、寮舎運営が魅力的な仕事になりうる環境整備が必要である。入所児童への支援の向上と、寮舎担当者（職員・寮長・寮母）の働き方の見直しは不可分の関係にあり、両者を視野に入れた検討が重要となる。
・発達に課題のある子どもへの対応は、集団で共に暮らす他の子どもたちにとっても「生活しづらい」要因として回答された。近年増加している発達に課題のある子どもへの対応については、「家庭的」支援では通用せず、何か特別のスキルでなければ対応できないのではないか、という懸念を職員自身も抱いている。職員への研修体制の担保が必要であり、とりわけ夫婦制における寮母の研修への参加が困難な場合が多く、配慮が求められる。発達に課題のある児童へのプログラムと「家庭的」支援との検討は、今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 19 件）

①板倉香子（2017）「社会的養護における性差の影響について－全国児童自立支援施設職員調査からの検討－」『洗足論叢』第 45 号、Pp.169-185、査読なし。

②家村昭矩（2017）「家族のかたち」『北海道における子どもの社会的養護を考える会・会報』第 26 号、Pp.1-2、査読なし。

③福間麻紀（2016）「就職動機と支援に関する一考察－児童自立支援施設における分析を通して－」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第 23 号、Pp.23-32、査読なし。

④新藤こずえ・板倉香子（2016）「児童自立支援施設における小舎夫婦制支援の検討（１）－『家庭的』支援の実践に焦点をあてて－」『立正社会福祉研究』第 17 巻１・２号(通巻第 31 号)、Pp.39-46、査読なし。

⑤新藤こずえ・板倉香子（2016）「児童自立支援施設における小舎夫婦制支援の検討（２）

『家庭的』支援の課題に焦点をあてて－」『立正社会福祉研究』第 17 巻１・２号(通巻第 31 号)、Pp.47-55、査読なし。

⑥栗田克実「全国児童自立支援施設入所児童へのアンケート調査結果　全体ならびに性別による回答傾向」Pp.3-19。
⑦新藤こずえ「入所児童の意識からみた支援の違い―夫婦制と夫婦制以外のケアを比較して―」Pp.21-42。
⑧福間麻紀・梶原敦「施設における支援についての検討」Pp.43-57。
⑨梶原敦・福間麻紀「施設における『生活のしやすさ』についての検討」Pp.59-73。
⑩板倉香子「全国児童自立支援施設職員調査アンケート結果との比較」Pp.75-93。
⑪村田一昭「入所児童の施設生活および家庭生活に関する自由記述」Pp.95-126。
⑫松本彩・岩田美香「児童自立支援施設職員へのヒアリング調査結果〈施設形態別〉〈男女別〉Pp.135-228。
⑥～⑫『社会的養護における「家庭的」支援の検討－児童自立支援施設からの考察－2016 年度報告書』2017 年、査読なし。

⑬栗田克実「全国児童自立支援施設職員へのアンケート調査結果　全体の回答結果ならびに性別クロス集計の結果」Pp.3-16。
⑭梶原敦・福間麻紀「『希望して就職したか否か』によるクロス集計の結果」Pp.17-36。
⑮新藤こずえ「ケアの形態（夫婦制・交代制）によるクロス集計の結果」Pp.37-58。
⑯板倉香子「寮の種類（男子寮・女子寮）によるクロス集計の結果」Pp.59-78。
⑰岩田美香「『家庭的』支援に関する検討」Pp.79-86。
⑱板倉香子・宮下裕秋「社会的養護における小規模化・家庭的支援の推進に関する自由意見」Pp.87-140。
⑲新藤こずえ・板倉香子「もと寮舎をもたれていた方へのヒアリング調査報告」Pp.141-187。
⑬～⑲『社会的養護における「家庭的」支援の検討－児童自立支援施設からの考察－2015 年度報告書』2016 年、査読なし。

〔学会発表〕（計６件）
①岩田美香「これからの母子生活支援施設に期待することー調査や実践からの学びー」平成 28 年度北海道母子生活支援施設協議会施設長会議（招聘講義）2017 年１月 27 日、道民活動センター（北海道札幌市）。

②家村昭矩「社会的養護の保育実践－検証・専門職の養育（虐待）観－」こどもセミナー 2016、2016 年 10 月１日、名寄市立大学（北海道名寄市）。

③新藤こずえ・板倉香子・岩田美香「児童自立支援施設における「『家庭的』支援」児童自立支援施設に併設された学校教育研究会 2016、2016 年 7 月 30 日、東広島芸術文化ホールくらら（広島県東広島市）。

④家村昭矩「こどもをとりまく状況と児童福祉施設の役割」平成 28 年度児童福祉施設職員研修、2016 年７月 27 日、北海道社会福祉協議会・社会福祉研修所（北海道札幌市）。

⑤岩田美香「社会的養護における家庭的支援について～児童自立支援施設での調査から」平成 2７年度北海道母子生活支援施設協議会

施設長会議（招聘講義）2016 年１月 28 日、道民活動センター（北海道札幌市）。

⑥岩田美香「児童自立支援施設における家庭的養護の検討」平成 27 年度全国児童自立支援施設職員研修会（招聘講演）2015 年９月 30 日、ホテルライフォート札幌（北海道札幌市）。

６．研究組織

（１）研究代表者

岩田　美香（IWATA, Mika）
法政大学・現代福祉学部・教授
研究者番号：３０３０５９２４

（２）研究分担者

野田　正人（NODA, Masato）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：１０２１８３３１

新藤　こずえ（SHINDOU, Kozue）
立正大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：９０４３３３９１

板倉　香子（ITAKURA, Kouko）
洗足こども短期大学・幼児教育保育科・講師
研究者番号：３０７３９１８１

栗田　克実（KURITA, Katsumi）
旭川大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：３０５３０１０９

福間　麻紀（HUKUMA, Maki）
北海道医療大学・看護福祉学部・講師
研究者番号：７０５８１８６７

（３）連携研究者

相澤　仁（AIZAWA, Masashi）
大分大学・福祉健康科学部・教授
研究者番号：００７５４８８９

大竹　智（Otake, Satoru）
立正大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：３０２５８６８６

村田　一昭（MURATA, Kazuaki）
愛知県立大学・教育福祉学部・准教授
研究者番号：２０３８１７４１

青木　紀（AOKI, Osamu）
北海道大学・教育学部・名誉教授
研究者番号：８０１２５４８４

家村　昭矩（IEMURA, Akinori）
名寄市立大学・短期大学部・特任教授
研究者番号：１０４１２８７６

（４）研究協力者

梶原　敦（KAJIHARA, Atsushi）
北海道中央児童相談所・福祉専門員

熊澤　健（KUMAZAWA, Ken）
横浜市向陽学園・寮長

宮下　裕秋（MIYASHITA, Hiroaki）
法政大学・人間科学研究科・大学院生（修士課程）

松本　彩（MATSUMOTO, Aya）
法政大学・現代福祉学部・学生